
「内側」からの風景：Alice M. Baconと『明治日本の内側』

A View from Within: Alice Mabel Bacon and A Japanese Interior

砂田 恵理加
Erika Sunada

Abstract:

This paper examines the image of home and domestic life described in A Japanese Interior (1893), written by Alice Mabel Bacon (1858-1918), an American educator who taught in Japan. In doing so, I argue how she expressed her feminist impulse as well as her concerns toward the rapidly modernizing American society.

Bacon came to Japan in 1888 and taught at Peeresses' School in Tokyo for one year. She returned to Japan again in 1900-02 to help her childhood friend, Ume Tsuda, found an English language school for Japanese women. Based on her experience, Bacon published three books and many essays on Japan in English, and eventually came to be known as a specialist of Japanese culture and women.

A Japanese Interior was Bacon's second book. Because the essays compiled in this book were originally written as personal letters to her family members, she tends to describe more intimate details of her daily life and straightforward impressions. Although her first book, Japanese Girls and Women, the first English book that focuses exclusively on Japanese women, received more recognition at the time, this book deserves close analysis.

While Bacon described Japanese culture as totally foreign and different in Japanese Girls and Women, she described Japanese culture as a part of her life in A Japanese Interior. As the title of the book suggests, she posits herself in the "interior" of a Japanese home as well as Japanese society, rather than as an observer from outside world. Although the book still reflects her cultural orientation of Victorian America, she shows many ideas that were quite distinct from the contemporary American society. Living in Japan and then writing about Japan gave her a new perspective to express her feminist impulse and criticism of American society.

This paper is also an attempt to reexamine the role of "Separate Sphere Ideology," which has long provided women's history with useful analytical framework. Rather than looking at how the ideology confined women, I examine how a woman like Bacon utilized the ideology to empower themselves. For an elite white woman like Alice Bacon, writing about Japan was more than introducing a foreign culture to the American public. It allowed her to express concerns toward the contemporary world.

Keywords: Women's history, the United States, US-Japan cultural relations, Yatoi, 19th century

キーワード：女性史、アメリカ合衆国、日米文化交流史、お雇い外国人、19世紀

はじめに

私というアメリカ人の思考が仲介しているので、間違いなくそれに影響されていますが、ここに描かれた日本の生活に関する見解は、日本人、そして日本人女性から提供されたものです。^{*1}

アリス・ベーコン(Alice Mabel Bacon: 1858-1918)は、1893年にアメリカで刊行された著書、『明治日本の内側』(*A Japanese Interior*) (以下『内側』と表記する)の序章で、このように同書が日本の女性の目を通じた家庭生活の記録であることを強調した。この本は彼女が華族女学校の講師として来日した際にアメリカの兄や姉に書き送った手紙をまとめた書簡集で、そこには日本人女性たちと東京に暮らした日々の出来事が生き生きと綴られている。^{*2} ベーコンは他にも2冊の日本に関する著作を発表したが、彼女の関心は常に家庭生活と女性にあった。

ベーコンが家庭と女性を軸に日本を描いたのは、男女でいわゆる異なる領域セパレート・スフィアを持つことが文明的であり、正しいとされた当時のアメリカのジェンダー意識と深く関わっている。周知の通り、19世紀を通じて家庭は女性が妻、母、主婦として君臨する「女性の帝国」とされ、女性が権威を確立することが可能な数少ない分野だった。^{*3} 当時すでに多くの白人女性作家が活躍していたが、その大部分は公的なパブリック、男性の領域に属するとされた政治や経済について語ることを避け、家庭や女性の人生について執筆した。女性に許された私的な領域プライベートを踏み越えない題材を選ぶことで、著述や出版という、従来は男性の領域に属する分野に進出していったのだ。^{*4} しかしベーコンは、単純にアメリカで理想とされた女性と家庭の関係を『内側』で描こうとしたのではない。その意味で彼女は、女性向けの題材を扱いつつも、異なる領域イデオロギーが女性に期待した役割を果たしたとは言えない。

長年アメリカ研究、特に女性史に重要な分析フレームワークを提供してきた異なる領域パラダイムに、マイノリティー女性史研究をはじめとする分野から、さまざまな批判・批評が加えられるようになって久しい。^{*5} 1999年の「初期共和国研究会年次大会」では、バーバラ・ウェルターバーバラ・ウェルターの古典的な論文が定義した「真の女性性」の妥当性が検討され、異なる領域パラダイムの歴史的、学術的な境界を「拡大、あるいは破裂させる」試みが行われた。^{*6} しかし、女性史研究者のキム・ワレンがまとめたように、異なる領域イデオロギーの下、女性に期待されてきた役割を理解することで、「女性たちがいつ・どこで(女性の領域の)境界を踏み越えたのか」を認識することが可能になるという点で、それは未だに研究者に有用な視点を提供している。^{*7} 本論文は、ベーコンが『内側』で家庭・女性に焦点をあて、女性の領域を遵守したように見せつつ、いかにより広いアメリカ社会と対抗しようとしたかを分析していく。ベーコンは、異なる領域イデオロギーを巧みに利用することで、ヴィクトリア期のアメリカで「こうあるべき」とされた女性像、家庭像を超える、新しい在り方を提示しようとしていた。

1. 『明治日本の女たち』と『明治日本の内側』の距離

アリス・ベーコンは、1858年、コネチカット州ニューヘイブンに生まれた。一家は特に裕福だったとは言えないが、多くの牧師を輩出した古くから続く名家であり、父のレナード(Leonard Bacon: 1802-1881)も会衆派(Congregational Church)の有力な牧師だった。アリスが14歳の時に、一家は日本初の官費女子留学生として渡米していた山川捨松(1860-1919)を寄宿させることになっ

た。^{*8} 1883年からは解放奴隷教育のためにヴァージニアに作られたハンプトン師範農業学校で教えたが、帰国した山川らに乞われて休職し、1888年来日した。アメリカに帰国した後は英語圏で初の詳細な日本人女性論として高く評価された『明治日本の女たち』(1891) (以下、『女たち』と表記する) や、本論文で考察する『内側』などを発表した。^{*9}

著作の中で最も多く版を重ねた『女たち』の執筆の際には、山川を通じて友人となった津田梅子(1864-1929)の大きな協力があつた。この本の分析をした高橋裕子は、本書が津田との共著だったことを示唆している。^{*10} 日本の歴史や文化に関する調査を重ね、共同作業で練り上げた『女たち』とは違い、単著である『内側』は、自分の日々の暮らしを綴った書簡集だ。ほぼ同時期に執筆や編集をしていたこの2冊の本だが、語りのスタイルだけではなく、内容にも大きな違いがある。女性と、その生活と一生を否応なしに決定づけていた家族と家庭のありかたに焦点が当たっている点では同じだが、それぞれの著作が理想とする家庭像が際立って異なっている。

高橋は『女たち』が「アメリカの理想とされる近代家族に対比されながら日本の『家庭』の改善が模索され、女性の労働について紹介しながら、『文明』化がいかんにして実現できるのかという視点で」書かれていると分析する。^{*11} つまりベーコンと津田はここで、アメリカの女性と家族・家庭をめぐる状況を理想的かつ唯一絶対の文明の在り方を支えるものと位置づけ、それとは異なる日本の状況を改善すべき、劣ったものと指摘している。『女たち』で彼女たちが比較の対象としたのは、アメリカでは19世紀に理想の家庭像として定着しだした、近代家族を構成する白人中産階級の家庭だったと高橋は指摘する。カール・デグラの古典的な研究によれば、近代家族の特徴は(1)相互に愛情を持つ男女の夫婦を中心とし、(2)主に女性は家事と育児、男性は家の外での賃金労働に従事し、男女で異なる領域を基盤とした相互補完的な役割を果たしたこと、(3)子供時代が重要視され、両親が子供の養育に多大な労力と関心を向け、(4)18世紀以前と比較すると、際立って少ない人数で構成されたこと、の4点にまとめられる。^{*12} 『女たち』では日本の家族形態および女性の地位と、この欧米的な近代家族との距離が指摘され、それを縮めるための解決策が示された。それは、アメリカ人読者の多くが内在化していた白人文明を頂点とする世界観を確認し、彼らの優越感をなぞってみせるものでもあつた。

しかしベーコンは『内側』では、この近代家族とは明らかに異なる家庭を好ましく描いた。『内側』と『女たち』で描かれた家族・家庭像の齟齬はどうして生まれたのだろうか。それを考察する手がかりは、*A Japanese Interior*という本のタイトルに隠されているようだ。ベーコンは『女たち』で日本を語る際、自分を外国人として、「外側」のexteriorから説明しようとした。彼女の「外側」性は、西洋文明の優越を前提にしたもので、「進んだ」アメリカの視点から、日本を考察した。それに対し『内側』では、劣った異文化を「改善」しようとする文明的なアメリカ白人女性ではなく、日本の「内側」に深く入り込んだ内部者として自分を提示している。自分をどこに位置付けて執筆したかで、この2冊の本の日本像に違いが生まれたと言える。

ベーコンは、このinteriorという言葉の巧みに利用した。interiorは「外側」、つまりexteriorの反義語であるが、これらが何の「内」と「外」について言及するかにより、実に多様な意味を持ちうる。ベーコンは、この本が「日本人の間の一人の外国人の生活の絵」であると書く。^{*13} 日本人と同居し、日本の家庭の「内側」で暮らしたからこそ、この著作が生まれたのだという自負をこのタイトルに込めたのだろう。その意味で彼女はinteriorを日本社会の中という意味だけではなく、家の中、家

庭という意味でも使っている。またこの言葉は、「外国」foreignに対峙する「内側」、国内としてのdomesticとも置き換え可能な意味を持ちうる。この際の内と外は単に国境によって分たれた地理的な区分ではない。どこが「内側」あるいは「同質なもの・同胞・国内」で、どこが「外側」、「異質なもの・他者・外国」なのか、場面によって巧みに線を引き直すことで、ベーコンは常に自分が属する方を「内側」として提示しようとする。また、interiorに「心の中、内面」という意味があることも忘れてはならないだろう。タイトルのinteriorは、日本の家庭の「内側」に入り込むことで、日本人の本音を知り、日本社会の内情を理解していくという、重層的な意味を帯びている。

異なる領域パラダイムの限界の一つは、人間という複雑で時に矛盾する存在を、男性/女性、公的/私的等の明確な枠に分類しようとする点にあると近年指摘されている。以下では、ベーコンが日米の枠組みや、男女の境界をあいまいに表現しつつ、日本での生活を描写した点に注目する。ベーコンの日本像を19世紀末の米国社会の文脈の中で理解することを本論文の最大の目標にしつつ、彼女が同時代のイデオロギーといかに折り合いをつけながら、自分の世界観を描き出したかを考察したい。同時に本論は、異なる領域という分析概念が半ば自明のこととして依拠してきた、男性/女性、社会/家庭などの相反する要素が、必ずしも常に固定された輪郭を持つものでも、安定した対称を描いてきたのでもないことを検証する試みでもある。恵まれた白人エリート女性という認識のみでは見えてこない、より複雑なベーコンの意識を浮かび上がらせ、人間のゆらぎを考慮に入れることで、異なる領域パラダイムのさらなる可能性を示唆したい。

次節では、ベーコンが日米双方の文化的要素が混在した生活をおくったことを指摘し、その意義を考える。第3節では、彼女の家庭が男性不在の「女性だけの領域」として提示された点について考察する。第4節では、ベーコンが本来は同国人であるアメリカ人を含めた英語圏の人々を「内側」に対する「外側」に位置づけたのはなぜかを分析する。こうした内と外の書きわけには、当時の米国社会に対する批判が込められていたと言える。

『内側』には、当時の社会規範が依拠していた価値観を内部から崩壊させかねない要素が含まれている。「外側」から日本を観察した『女たち』よりも、自らの経験を通じて日本を語った『内側』の方が、ベーコンの心情に寄り添う面があったようだ。彼女は『内側』を通じて、あるいは自分でもはっきりと意識していなかったかもしれない、言葉として表出するよりもはるかに強いアメリカ社会への不信任感を表していた。

2. 和洋折衷の家庭の中で

ベーコンの人生を紹介した高木八尺は、彼女が日本滞在中「ほとんどずっと日本人の社会の中で過ごした」と書いたが、それは彼女が西洋の影響を受けない、伝統的な日本社会に暮らしたということではない。^{*14} ベーコンの日本での生活は、日本的な要素と西洋的な要素が共存する、非常に特殊な環境の中で営まれた。ベーコンの来日が決まると、津田は彼女と共同生活するため、東京の麹町区紀尾井町に大きな家を借りた。^{*15} ベーコンが「一軒家で、半分日本式、半分外国式」と説明したその建物は、彼女たちの家庭の特殊性を象徴していた。^{*16} 2つの棟をつなぎ合わせた形になっており、ベーコンの住んだ棟は、靴のまま上がる「日本人が『外国式』と呼ぶスタイル」で、「二階建てで、ガラス窓があり、ドアは引っ張って開けるタイプ」で、「玄関と、二つの部屋から成り立っており、普通のアメリカの家にあるような家具調度がそろって」いた。この棟は、日本人の住人

用の、より大きな建物と渡り廊下でつながっていた。こちらは「絨毯であるばかりではなく、椅子やテーブル、ベッドの代わりにもなる」「柔らかな白いマット」、畳が敷き詰められ、内装も和風で、履物を脱いで上がった。^{*17}

ベーコンが「家族」と呼ぶこの家の住人の中心は、「華族女学校の3人の教師、同学校の3人の生徒、西洋の文化、主に英語を学ぶために同居している2人の若い娘たち」だった。^{*18} 3人の教師とは、ベーコンと、本の中では「ミネ」という仮名で呼ばれている津田、そして「この家の監督者(chaperon)である、優しい面差しの未亡人」とされる津田のいとこの渡辺政子だった。^{*19} 未婚のベーコンと津田、そして未亡人の渡辺が中心となり、女生徒を加えてこの所帯を形成していたことになる。

欧米から来日した当時の多くの宣教師が西洋式の生活スタイルを崩そうとしなかったのとは対照的に、ベーコンはこの「二重の世帯」で、積極的に日本の習慣を取り入れようとした。^{*20} 台所は一つで、日本人の家族の食事は「御膳炊き」が七輪やかまどを使って作り、ベーコンの洋風の食事は「コック」が料理用ストーヴを使い用意した。しかし、来日してから4ヶ月ほどたつころには日本食にも慣れ、鰻屋から取り寄せた鰻と、しょうゆと砂糖で「日本風に」味付けをした鶏肉にパンを添えて、津田と共に夕食をとっている。^{*21} さらに3ヶ月後には、当時の西洋人の多くが「野蛮」とみなし、日本食の中でも特に評判が悪かった生魚(刺身)に関し、「偏見をポケットにしまいこんで食べてみれば、そんなに悪いものではない」とコメントしている。^{*22} ベーコンが親しんだ日本の生活習慣は、食事だけではない。縁側を渡り、もう1つの棟に行けば日本人の住人に「いつでも暖かく迎え」られ、団欒に加わることもしばしばだった。^{*23} 日本語の習得に努力し、下駄を履いて歩こうとした。家でくつろぐときには「とても着心地がよくて、休まるので」和装をするようになった。^{*24}

この家の住人たちは、年中行事も和洋双方の要素を取り入れて楽しんだ。靴下をさげ、「英語と日本語の両方で宛名を書いた」プレゼントを詰めてクリスマスを祝ったが、ベーコンと津田は夜遅くまでかけてこれらの贈り物に「日本で贈り物をするときには欠かせない」熨斗をつけている。^{*25} ベーコンがクリスマス・プレゼントとして受け取ったのは、絹の帯、住所と名前を日本語で入れた「明るい色の風呂敷」、梅の木の盆栽、「奇妙なクリスマスツリー」と説明した正月用のお飾りである。^{*26} 本来キリストの誕生を祝う日であり、キリスト教を根拠に西洋文化の優越を日本人に示す絶好の機会であるはずのクリスマスだが、この家では、西洋の習慣に日本的な要素を多分に取り入れたものとなった。和洋折衷の家と同様、彼女の生活も日本と西洋の要素が混在するものとなっていく。

ベーコンが帰属意識、つまり「『内側』にいる」と感じることができるのは、外国の影響の少ない日本でも、完全に外国的(西洋的)な社会でもなく、こうした和洋折衷の特殊な環境の中だった。また、そのような状況下であれば、自宅でなくてもそこを自分の「内側」として描き出している。同居の津田だけではなく、明治を代表する軍人、大山巖(1842-1916)の夫人となった幼馴染の山川捨松など、英語を話す他の日本の友人たちとも、あたかも家族のような密接な関係を築いている。ベーコンが日本での生活を日本の要素とアメリカ的なものが入り混じるものとして描いたのは、実際の状況がどうだったかという事以上に、「内側」の特殊性を印象付け、そこに自分を違和感なく入れ込むためだった。日本での一年間の滞在も終わりに近づいたある日、ベーコンは、自分が「外

国人にとっては日本人的すぎるが、日本人には外国的すぎ、(滞日中の) 宣教師たちにとっては世俗的すぎて、宣教師以外の外国人居住者から見れば十分に世俗的ではない」、どっちつかずの存在だと書いている。そして、「ごく親しい日本人の友達を除いては、私を外れ者と考えない様子の方は、この東京にいない」と続ける。^{*27} どの枠にも当てはまらない自分は、ごくわずかな、和洋折衷の特殊な「内側」の人々だけに理解されるものと説明している。

ベーコンが、この特殊な日本での生活を好ましい自分の「内側」と提示したのは、彼女が本来は帰属意識を感じるべきアメリカ社会の中で、「外れ者」の感覚を持ち続けたからだとも考えられる。ベーコンは北部の名家に生まれながら、常に主流のアメリカ社会から一定の距離を置き続けた人だった。南部に渡り解放奴隷の教育に尽力し、日本の女子教育に貢献した。主婦の献身や母性が最上の女性の徳と考えられた中、意志を持って独身を貫いた。教育を与えることで主流社会の外に置かれた人々をかぎりなく主流に近づけていくことを生涯の仕事とする一方で、異文化に親しみ、これを評価した。このようにベーコンが主流の「外側」にこだわり続けたのは、本来は自分にとって「内側」であるはずのアメリカ社会に何らかの疑念を抱いていたからだと考えられる。この本で描いた、特殊で排他的な「内側」の居心地の良さは、米国主流社会に対する違和感の裏返しだとも言える。

白人アメリカ人女性であるベーコンが、日本の家庭に入り込み生活することは、白人文明の絶対的な優越性を否定することにも繋がる。彼女はこの家で暮らすうちに、『文明』という言葉は定義するのも理解するのもとても難しく、アメリカを立った時に分かっていたほど、今はその意味が定かではないと感じるようになったことを告白している。^{*28} 次節では、近代化のすすむ19世紀末のアメリカの中で、新興の中産階級が作り上げた——あるいはそうした規範を作りあげ、その中で生きることによって人々が自らを中産階級化しようとした——理想の家庭像とは全く異なるベーコンの生活と、その背景にあった彼女の違和感をより詳しく分析していく。

3. 「女性だけ」の領域

ベーコンは『内側』で女性と家庭の関係を強調したが、それは異なる領域イデオロギーが女性の領域とした家庭とは様相が異なる。「私たちの家庭は、女性だけで構成されていた」と本人が書いたように、彼女の家庭にはジェンダーの均質性という、際立った特徴があるからだ。^{*29} 当時家庭は主婦が主役の「女性の領域」だと考えられたが、それは一家の稼ぎ手である男性が労働をする「男性の領域」という公的社会との対比の中で成り立つ概念だった。これに対し、ベーコンが『内側』で描いたのは、男性を必要としない、女性みの自己完結した世界である。ベーコンは女性と家庭のつながりを強調しつつも、当時のジェンダー観を超えた家庭像・女性像を提示したと言える。一見するよりも、はるかに強いフェミニスト的な世界観をここに見ることができる。^{*30}

異なる領域イデオロギーの実践の場とされた、近代的な家族は、夫婦と子供という二世帯から成る比較的少ない人数で構成されるのが普通なのに対し、ベーコンの暮らした家の敷地内には、女性ばかりの居住者8人に加え、召使およびその家族を加えたおよそ20人が住んでいた。この「家族」は、結婚、血縁など私的なつながりによって構成されたものではなく、先生と生徒、同僚同士という公的な関係性を引きずったものであった。津田と渡辺は親戚だったし、渡辺の娘も同居していたはずだが、そうした私的な関係が強調されることはない。使用人の幼い娘や息子たちも住んでいた

が、子供に関する記述は少なく、ベーコンの関心は明らかに大人の使用人たち、馬、犬などの動物の方にむけられている。

実はこの「女性だけ」の一家の敷地には、料理人兼召使、馬丁や車夫等の男性雇い人が住んでいた。男性使用人にまつわるエピソードは、ベーコンのお気に入りの題材であり、その存在感はとうてい無視できないものだった。ベーコン自身、序章で女性住人を紹介した後、男性の雇い人に言及し、彼らを家族の中に入れていた。^{*31} しかし、こうした男性使用人は一家の重要な構成員でありながら、女性の対称となる男性として記述されていない。彼らは、女性化された人物、あるいは飼ドメステイケートドいならされた動物のように、つまり文字通り家庭化、「内側」化された存在として描かれているのだ。

ベーコンの男性料理人は料理の腕もよく、「とても役に立つ」、「すばらしい人物」だった。^{*32} この注文の多い女主人と意思疎通を図りつつ、家計簿をつけ、「メリー・クリスマス」という英語を覚え、正月には門松を作り、後述するように彼女が素行の悪い馬丁を解雇する際には、良き相談相手となっている。^{*33} ベーコンが折に触れ「クックさん(Cook San)」と敬称をつけて書いていることから、彼に一目置いていたことが分かる。

この料理人は「侍の階級」に属し、「とても教養があり、楽しみのために漢詩を読む」ほど学問のある男性だった。ベーコンはこの点を強調し、「アメリカで料理人が、彼女の余暇の時間にホラティウスやヴェルギリウスを読んでいるなんて、想像できないでしょう！」と述べている。^{*34} この料理人は明治維新のために稼ぎを失った士族だったと推測できるが、武士である彼は、今やベーコンが当然のごとく「彼女の」と書いたように、アメリカでは女性の仕事とされていた、一般家庭の料理人になっている。ベーコンは、日本の男性的な力、武勇の象徴でもある武士を、料理と家事を担当する女性的な召使として扱っている。

先述のウェルターの研究によれば、19世紀のアメリカでは、宗教的に敬虔、性的に純潔、夫などに従順、そして家庭的であることが、女性の美德と考えられていた。この料理人も、基本的にこうした美德の規範に沿って、「すばらしい人物」とされている。あるいはそれは「真の女性」のパロディであるのかもしれない。彼は「キリスト教徒であり最も正直で道徳的な男」なので、ベーコンの馬丁の飲酒癖や賭け事、そして「3人の妻を持っている」ことに呆れ、憤慨している。^{*35} 料理人の「女性的」な美德は、馬丁の男性的な悪癖と対照され、より明確になる。馬丁は「格好よく着物を着こなし、美しく良く走る、魅力的な男性だったが、深酒を止めず、人を騙すなど一向に家庭化ドメステイケートドされない。^{*36} やがてベーコンは、この男性的な魅力と脅威を併せ持つ馬丁を解雇し、自分の「内側」から排除していく。^{*37}

ベーコンは、人力車を引かせるための下男も雇ってもいた。人力車を引くには、非常に強い力が必要で、ベーコンの車引きも彼女がヘラクレスに例えたほどの屈強な男性だった。しかし彼女はこうした下男たちを力強い男性としてではなく、あたかも飼ドメステイケートドいならされた動物——多くの場合は馬——のように描く。ある日雇った2人の車引きを指して、「彼らはとても強く、足も速く、元気いっばいで二頭の子馬のように澁刺としていた。(彼らの車に乗るのは)まるで、きかんぼうの馬に轡をはめずに乗るようなものだった」と書く。^{*38} 中でもベーコンは、「馬のように早く走り、私をたった一枚の羽根のように軽々と引っ張っていく」ことができるヤサクという車夫を非常に気に入り、お抱え車引きとして採用する。^{*39}

ある日ベーコンは「漆塗りの背のところに、自分のイニシャルを入れた」、高価な人力車をあつらえた。彼女は背中に自分のイニシャルを刺繍した法被をヤサクに与え、さらに「彼が夜に車を引くときに持つ提灯」にも、自分のイニシャルを入れている。^{*40} ヤサクにくりかえし自分の印をつけ帰属を強調することで、彼をあたかも動物をそうするかのように所有し、その占有権を誇示しようとする。ベーコンは新しい装備にいたく満足して、これを乗り回すのは「ひどくいい気分だった」と述べる。車夫たちは屈強な「男らしい」ドメスティケイテッド体軀をしているが、女性の対称である男性として描かれる事はない。彼らは家庭化された、つまり飼いならされ、所有され、「内側」化された者として描かれている。

ヤサクには喧嘩っ早いという、クリスチャンの女性が眉をひそめそうな欠点があったが、彼を「内側」化したベーコンにとっては、それすら脅威を感じるものではない。ある日の道中、ヤサクは車の行く手を阻んだ通りすがりの男と喧嘩を始める。ヤサクは「手なづけられていない子馬のように」飛び上り一撃を加え、「大きな鳥のように」法被の袖を広げ相手の男に襲いかかり、叩きのめしてしまう。^{*41} 自分が危うく車から放り出されるところだったにも拘わらず、ベーコンはこの事件を「ひどく可笑しく、なす術もなく車に座っている間、大笑いをしているしかなかった」と紹介している。ヤサクの喧嘩を、貴婦人を守るべく奮闘する、西洋的な騎士道精神の発揮と見なすこともない。むしろ彼を繰り返す動物に例え、これを自分に「与えられた侮辱を晴らす」という健気な忠誠心の発露だと説明する。^{*42}

こうした男性を「内側」化した記述は、異人種の男性を女性的、あるいは動物的に描くことで、その人種の劣等性を強調する当時良く見られた白人優越主義のレトリックと重なる部分もある。しかし、ベーコンは料理人の女性的美德を明らかに肯定的に描いているし、ヤサクの動物性も異人種の劣等を裏付ける野蛮さとしてではなく、素朴で無邪気な、良い意味での純粋さと表現している。ベーコンは、自分の家を「男性の領域」の対抗概念としての「女性の領域」ではなく、文字どおり「女性だけの領域」として描き出してみせるために、彼らから慎重に男性性を取り除き、ここと矛盾しない存在にした。

ベーコンの女性だけの家庭は、近代家族に期待されたように、子供の養育、すなわち次世代の男性市民を育てる役割を担うこともない。彼女はこの本来の機能を失った家庭である「女性だけの領域」に何を求めたのだろうか。グレナ・マシューズによると、ベーコンが生まれ育った19世紀中期は、「家庭性の黄金期」であった。^{*43} 家庭の重要性が広く社会に認められ、その守り手である主婦である女性たちの自己肯定感も強かった。しかしかつてない勢いで貧富の差が開いた、1880年代のいわゆる「金びか時代」を経て、家庭はその輝きを失っていく。家庭の価値が広く認められたひとつの理由は、そこが次世代の市民を育てる場だったからである。女性たちは子供の養育という私的な役割を果たしつつ、良き市民の育成という形でより大きな公的社会に貢献していると考えられてきた。しかし80年代以降、良き市民が均等な機会を生かし、競争を通じて社会的に上昇できるという共和国思想は、「皮肉な冗談」になってしまったとマシューズは言う。^{*44} 共和国思想は根強く残り、家庭への称賛も途絶えることはなかったものの、その存在感は人々の意識の中で弱まっていった。同時に、市民の養育を担ってきた家庭と母親・主婦の役割も、その文化的な価値を減じていく。良き市民の成功が必ずしも保証されず、労働の価値が金銭によって計られ、貨幣の意味が年々と増していく中、それとは異なる原理を持つ家庭は、かつてほどの権威を保つことができなくなったか

らだ。

ベーコンが『内側』の基となる手紙を書いた80年代末は、このように長年アメリカ社会で信じられてきた家庭の意義が揺らぎつつあった時代にあたる。女性の領域である家庭と、男性の領域の公的社會との力のバランスが崩れる中、多くの人が家庭の新しい社会的役割や意味を探ろうとしていた。家事や育児のありかたの変革を通じて社会改良をめざす運動も熱心に行われ、その一部はいわゆるユートピアン・コミュニティを形成した。同様に、労働や家事の機械化と職業化を通じ、階級間や男女間の力の不均衡を是正した世界を描いて大きな注目を集めたエドワード・ベラミー (Edward Bellamy: 1850-1898) の『かえりみれば』 (*Looking Backward*, 1888) をはじめとする、ユートピア小説も当時数多く発表された。^{*45} ドロリス・ハイデンは、『かえりみれば』とその続編である『平等』 (*Equality*, 1897) が、「特に出来の良い小説ではないし、その筋に独自性もない」にも拘わらず広く読まれたのは、80年代後半のアメリカの人々が抱いた「産業のあり方と家庭あり方の改革への強い関心」と、「家庭生活の良いイメージへの渴望」を反映していたと説明する。^{*46} ベラミーの描いた世界は、近代化の生み出した社会的な歪みに心を痛める知識人層に大きな影響を与えたのと同時に、彼らが抱いた現状への危機感を映しだすものでもあった。ベーコンの『内側』をユートピア小説と呼ぶことはできないが、こうした小説を生み出した時代を色濃く反映している。ベラミーは家庭から家事をなくすことで女性を家事労働から解放し、男女の力関係の不均衡を是正しようとしたが、ベーコンは家庭から男性を排除することで、理想的な女性の生活を描こうとした。結果として生まれた世界は異なっているが、いずれの著作でも女性たちは生き生きと充実した日々を送っている。

自分にとっての「内側」を描写するときに、ベーコンは男性の不在を印象付けようとした。そうすることでベーコンは自分が暮らした家庭を、男女の力学の上に築かれた「女性の領域」ではなく、「女性だけの領域」として描こうとした。この女性だけの家庭を描いた『内側』は、単なる外国滞在記としてではなく、より広いアメリカの社会的文脈のなかで理解されるべきものだ。ベーコンがこの本で提示した女性だけの家は、男女の領域の力のバランスが崩れだしたアメリカの中で、家庭の新しい意味・価値を探ろうとする知識人たちの幅広い努力の中で生まれたものであった。

4. ^{ドメスティック} ^{フォーリン} 家庭の外の異なるもの：アメリカ社会へのアンチテーゼ

ベーコンが『内側』で描いた家庭は、アメリカで理想とされた家庭の在り方とは全く異なるものだった。和洋折衷で、「女性だけの領域」のベーコンの家庭は、白人文明がその優越の証とした近代家族の家庭とはかけ離れたものだ。この特殊な家庭を肯定的に描くことは、近代家族像を否定し、アメリカの中産階級的な価値観に挑むことでもあった。それにも拘わらずベーコンの著作が比較的多くの読者を獲得し、特に批判を受けることもなかったのは、これがアメリカから地理的に遠い日本での生活として提示されているからであろう。ベラミーが理想の社会を、当時から見て100年以上先のアメリカに置いたのと同様、ベーコンは当時のアメリカの文脈から切り離された異文化滞在記の中でこの家庭を描いた。だが、既存の理想像とは全く異なる幸せなあり方を提示したという点で、ベーコンの描いた家庭は、やはり現状のアメリカ社会を批判、批評する場であった。この節では「内側」に対する「外側」がどのように提示されているかを分析し、彼女が感じていたアメリカへの違和感について考察する。

ベーコンは「内側」と「外側」の境界線を場面によって巧みに引き直すことで、常に自分とその仲間を「内側」に入れ、「外側」と対比させている。「内側」にいるのは、文字どおり家の内側の同居人、あるいはごく親しい友人たち、「外側」はそれ以外の人々であった。同時に彼女の記述の中では、しばしばこの内と外を分ける軸がねじれ、家の「内側」への対抗概念として、外国人や外国的なもの、つまり本来は日本国内という意味での「内側」に対する「外側」が置かれている。家事について説明した際、ベーコンは、日本の家は機能的にできているので、掃除でも食事でもさほど手間にならないと述べ、「最近になって海外(abroad)から輸入されたものを除いて」日本の家の中に人を悩ますものは何もないと書く。^{*47} 家の「内側」を混乱させる望ましくない要素は、海外という国の「外側」からやってくると説明するのだ。このように彼女は家の「内側」に対する「外側」にアメリカを含む欧米社会を据え、これに異質なものを、好ましくないもの、といった否定的な意味合いを付与している。こうした記述には、アメリカ社会に対する疑念や批判が織り込まれていた。

ベーコンは序章の冒頭で、『内側』が「東洋に住んだ普通の外国人」の経験の記録ではないことを断り、その理由として自分が「宮内省管轄下」の「最も保守的で、反外国的な」学校の教師として日本に招聘されたことを挙げている。^{*48} 宮内省は英語でImperial Household Departmentであり、当時の日本で最も権威ある一族の家庭を示していた。最も外国人嫌いであるはずの、「内側」の中の「内側」から招かれたという特権性を強調することで、ベーコンは自分と他の在日外国人との差異化を図る。彼女は国としての「内側」と家庭としての「内側」を同一視する記述を繰り返すことで、自分の特殊な立場を印象付けようとする。ある昼食会で、同席した他の外国人よりも自分が「日本食を楽に食べられて、お箸を上手に使いこなすことができた」ことに喜び、これは「私の(日本人の)友人たちが何度もお宅でのお昼に招いてくれたから」だと述べ、「外国人は長年日本に住んでも、私が東京に所帯を持ってからのほんの数か月の間に見ることができたほども、本当の日本の生活を見ていない」と、優越感を隠さない。^{*49}

自分が特権的に入ることができる好ましい「内側」との対比の中で、ベーコンは「外側」にある欧米人の社会を自分にとって異質なものとして描いている。彼女は時に在日欧米人のコミュニティに出入りしたが、そこでは居心地の悪い思いをする事の方が多い。ある日ベーコンは、芝にあるイギリス系の教会に行こうとする。ところがその日に限ってなぜか車夫が何度も道を間違え、目的の教会には「10分も遅れてついでに、私はお上品で堅苦しいイギリスの信者の間を、礼拝の真っ只中入っていかねばならなかった」と書く。^{*50} 遅刻したことから来る居心地の悪さに加え、「お上品で堅苦しい」という形容からは、この教会の信者を自分とは違う「外側」の人間として表現しようというベーコンの意図が感じられる。この教会とはよほど相性が悪かったようで、その約2ヵ月後にクリスマス礼拝に行ったときには、見事な飾りつけと英語の礼拝を楽しみつつも「途中で祈祷書のどこを読んでいるか分からなくなってしまい、イギリス人のご婦人に教えてもらうという失態を演じて」しまう。この婦人が自分のことを「異教徒か非国教会信者(a heathen or a dissenter)だと思ったに違いない。イギリス人の目にはどちらが悪く映るのかは分からないけれど」と述べ、「異教徒」つまり明らかに「外側」の人だと思われたと告白している。^{*51} 日本文化に親しみ、「内側」に深く入り込んだベーコンは、欧米人からは「外側」に属しているように見えると主張するのだ。

ベーコンは、同国人であるアメリカ人の集まりの中でもこの場違いな感覚にとらわれている。7

月のある夜、「良いアメリカ人はみんな」アメリカ独立記念日を祝うダンスパーティに出かけたので、彼女も「義務感から」参加するが、「舞踏室にいる間、自分らしくしていることができなかつた」と述べている。^{*52} アメリカ人の集まりの中で居心地の悪さを感じたことを書くことで、ここを自分にとっての「外側」として提示する。

こうした違和感は、2人のアメリカ人男性がベーコンの家を訪れた時のエピソードからも読み取ることができる。ある日の夕刻、彼女は監督派の有名な牧師であったフィリップ・ブルック博士と、ヴィッカー博士という2人のアメリカ人の訪問を受けた。ベーコンは彼らの訪問を「アメリカ的だ」と喜ぶが、同時に彼らを一貫して「外国人」と呼び、その「外側」性を強調する。ベーコンは「1年もの間日本人に混じって生活していると、すべての外国人の男性は異常に大きく見える。中でも特に大きなこの2人の男性が、出入り口の低い、この家の小さな客間にいる時の私の心配を想像してごらんさい」と書き、彼らの身体そのものが、彼女の住んだ「内側」の中で奇異に見えたと指摘している。^{*53} ベーコンは「少なくともどちらかの1人が、天井に頭をぶつけるのではないかと」気が気ではなくなった。作りの小さなベーコンの客間で、共に着物を着てくつろいでいた津田とベーコンに向き合う2人の大きなアメリカ人男性は、この空間の中ではいかにも異質である。同じアメリカ人であるものの、西洋の文明的優越を体現するかのようこの2人の大柄な男性の博士は、ベーコンの「内側」に紛れ込んだ、ちぐはぐで場違いな「外側」の存在なのだ。

欧米的なものを「外側」としたベーコンのこうした記述には、大きな変化の時代を迎えていた当時のアメリカ社会の中で、彼女が抱いた違和感が反映されているようだ。ベーコンが少女期を過ごした、家庭が大きな文化的な価値を持った19世紀半ばのアメリカ社会の生活は、日を追うごとに遠いものになりつつあった。マシューズによると、金びか時代を経験したアメリカの人々に共通していたのは、利益追求への貪欲さや、急激な変化の中で落ちぶれた人々が引き起こす社会不安に対する恐怖心であった。ビジネスが肥大化したこの「恐怖の時代」、家庭の「贖罪の力」にすがろうとするのは、「感傷的な現実逃避」であったのではないかと彼女は言う。^{*54} 巨大産業が生まれ、アメリカでのビジネスのありかたそのものが変化したこの当時、家庭は公的社會に異なる価値観を提供することで社会全体のバランスをとるといふ、古くから期待されてきた役割を果たし得なくなってきたのである。

こうした変化は、ベーコンのような古くから続くエリート一族出身の女性にとって望ましいものではなかった。社会が世俗化し、一部の金持ちが新しいエリート階級を形成し、より多くの人々が中産階級化するにつれ、ベーコン家のような宗教を基盤とする古いタイプの文化的エリート層の社會への影響力は確実に弱まっていったからである。『内側』には、アメリカ社會に対する批判は明瞭な言葉では書かれないが、ベーコンはアメリカほど近代化されていない日本での生活を好ましく描くと共に、欧米的なものを常に「外側」に据え、これに対する違和感を書き込むことで、アメリカ社會への不安感や不信感を表明している。

ベーコンが『内側』で描いた家は地理的には日本にあるが、そこから発せられる批判・批評は日本にはなく、アメリカ社會に向いている。ベーコンは読者の多くにとって外国だった日本に家庭を置きつつ、アメリカの家庭と女性がかつて持っていたとされる、男性の領域/世俗性への批判の力と、美德の守り手としての権威とを再度取り戻そうとしている。ベーコンは欧米圏の人々を、彼女の家庭、あるいは「内側」になじめない「外(国)人」として描くことで、間接的に当時のアメ

リカ社会の在り方に疑問を投げかけたのである。

5. 結論：家庭というユートピア

当時アメリカで一般的だった異文化表象の形を踏襲するならば、むしろ日本人を「西洋にとっての絶対的な他者」として描き出した方が、読者に分かりやすい日本像を提供することができただろう。^{*55} しかしベーコンは、少なくともこの著作においては、日本の異質性を強調しなかった。ベーコンは生活に、完全に日本的でもアメリカ的でもない、その双方の要素を取り入れることで、アメリカの白人文明を至上のものとする価値観を否定した。また、自分の家庭を女性だけの領域として描くことで、そこを自己完結した女性の世界とした。ベーコンが『内側』で描いた世界にあるのは、彼女と少数の理解者が住む「内側」と、それ以外の「外側」の区別であり、国籍や性別といった既存の枠組みは重視されない。そこは男性の世界から隔てられた「女性の領域」ではあったが、バーバラ・ウェルターが指摘した19世紀のアメリカ社会で広く受容されてきた白人中流階級の女性の領域とはきわめて異なるものであった。

19世紀に読まれた小説やエッセイを分析したカーク・ジェフリーは、当時、家庭が一種のユートピア的理想の実践の場と考えられていたと述べている。^{*56} 彼の研究によれば、家庭もユートピアン・コミュニティも近代化と市場経済の進む社会からの逃避の場であり、意識的に企画されたものであり、神の意志に基づいた完璧な世界にむけて近づいていこうとする、キリスト教的な完全主義(perfectionism)に基づいたものであった。^{*57} 日本滞在記の中でベーコンが描いた、風変わりな好ましい家庭は、ジェフリーが指摘するこうした当時のユートピア的理想を反映したものと思われる。

『内側』の出版から4年後の1897年、ベーコンはニューハンプシャー州のスクワム湖周辺に土地を買い、数軒のコテージを建て友人たちと夏を過ごすキャンプを設立した。ディープハイヴンと命名されたこのキャンプは、日々失われていく精神的、あるいは宗教的支えを自然の中に見出そうとする「世紀転換期のアメリカの圧倒的な衝動」から生まれたものであった。^{*58} ここではベーコンの方針で、服装、食事、宿泊施設のすべての面で「簡素であること」そして「変わらないこと」が重視された。^{*59} 自然の中での簡素な生活は、『内側』で描かれた日本の生活とは異なるものの、それらが発するメッセージは同じである。そこにはますます近代化の進むアメリカ社会への疑念が込められている。少数の理解者と共に家庭なり、キャンプなりといった「内側」を構成することで、「外側」であるアメリカ社会から自分たちを切り離し、逃避するのと同時に、そこでの日々の営みを通じて社会に対する批判とした。

ベーコンは『内側』では『女たち』でそうしたように、文化的に優越するアメリカ白人女性として日本を記述しようとしなかった。この著作では、当時の多くのアメリカの読者が内在化していた、日米の文化や性役割の概念を裏切るような記述を重ね、さまざまな枠組みを混乱させることで、欧米で理想的と考えられた近代的家族とは違う家族・家庭のあり方を好ましく描いた。そこには、当時のエリート知識人が感じていたであろう、変わりゆくアメリカ社会に対する違和感や批判が反映されていた。

ベーコンの『内側』には、珍しい文化を紹介する外国滞在記の枠を超えたメッセージが含まれている。ベーコンの暮らした異文化の中の家庭は、既存のものとは異なる新しい生活の在り方を示す、

当時のアメリカ社会へのアンチテーゼであった。この風変わりな、しかし好ましい家庭生活の記録に、世紀末のアメリカ社会に生きた、あるアメリカ人女性の複雑な意識を読み取ることができる。

-
- * 本論文の執筆にあたり、平成19年度「国士舘大学特色ある教育・研究支援プログラム」の助成を受けた。
 - * 1 Alice Mabel Bacon, *A Japanese Interior* (Boston, Houghton, Mifflin and Company, 1893), xiii. 日本語訳として、久野明子訳『華族女学校教師の見た明治日本の内側』（中央公論社、1994年）が刊行されているが、本稿の訳は筆者による。
 - * 2 『内側』の一部は、ハンプトン校出版の月刊誌、*The Southern Workman*の1888年9月～90年2月号に不定期で掲載されていた。『内側』と雑誌記事には内容、表現の相違があるが、それについては別の機会に論じたい。
 - * 3 Mrs. A. J. Graves, *Women in America: Being an Examination into the Moral and Intellectual Condition of American Female Society* (New York: Harper and Brothers, 1847). Sarah A. Leavitt, *From Catharine Beecher to Martha Stewart: A Cultural History of Domestic Advice* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2002), 40-72. Glenna Matthews, *Just A Housewife: The Rise & Fall of Domesticity in America* (New York: Oxford University Press, 1987), 148.
 - * 4 女性作家は文学という男性の領域を「侵犯」することを避けるため、自分の作品の文学的価値を過小評価する傾向にすらあった。Nina Baym, *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70*, second edition (Urbana: University of Illinois Press, 1993), 32.
 - * 5 異なる領域パラダイムに関する議論・研究史については以下を参照。Cathy N. Davidson and Jessamyn Hatcher, "Introduction," in Davidson and Hatcher, eds., *No More Separate Spheres!* (Durham: Duke University Press, 2002): 7-26; Linda Kerber, "Separate Spheres, Female Worlds, Woman's Place: The Rhetoric of Women's History," *Journal of American History*, 75 (June 1988), 9-39; Kim Warren, "Separate Spheres: Analytical Persistence in United States Women's History," *History Compass*, 5 (2007): 262-277.
 - * 6 Barbara Welter, "Cult of True Womanhood, 1820-1860," *American Quarterly*, 18 (1966) 151-174. "Redefining Womanly Behavior in the Early Republic: Essays from a SHEAR Symposium," *Journal of the Early Republic*, 21 (2001), 71-115.
 - * 7 Warren, 270.
 - * 8 ベーコンの生い立ちと山川捨松との関係は、久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松—日本初の女子留学生』（中公文庫、1993年）に詳しい。
 - * 9 Alice Mabel Bacon, *Japanese Girls and Women* (Boston: Houghton, Mifflin and Company, 1891). 本書の訳は矢口祐人、砂田恵理加訳『明治日本の女たち』（みすず書房、2003年）。
 - * 10 高橋裕子、『津田梅子の社会史』（玉川大学出版会、2002年）、140-142。
 - * 11 高橋裕子、『「文明化された」家族の国アメリカ』、上杉忍・巽孝之編、『アメリカの文明と自画像』（ミネルヴァ書房、2006年）、131。
 - * 12 Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present* (New York: Oxford University Press, 1980), 8-9.

- * 13 Bacon, *Interior*, xiii.
- * 14 Yasaka Takagi, "Bacon, Alice Mabel" in Edward T. James ed., *Notable American Women 1607-1950: A Biographical Dictionary*, vol. 1, (Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1971), 79.
- * 15 Yoshiko Furuki, et al eds., *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother* (New York: Weatherhill, 1991), 313.
- * 16 Bacon, *Interior*, vii.
- * 17 *Ibid.*, viii-ix.
- * 18 *Ibid.*, xii.
- * 19 *Ibid.*, 5.
- * 20 *Ibid.*, x.
- * 21 *Ibid.*, 32.
- * 22 *Ibid.*, 122.
- * 23 *Ibid.*, xi.
- * 24 *Ibid.*, 230.
- * 25 *Ibid.*, 92-93.
- * 26 *Ibid.*, 94-95.
- * 27 *Ibid.*, 231.
- * 28 *Ibid.*, 228.
- * 29 *Ibid.*, xii.
- * 30 女性のコミュニティで培われたフェミニズムの研究に関しては、以下を参照。Patricia Ann Palmieri, *In Adamless Eden: The Community of Women Faculty at Wellesley* (New Haven: Yale University Press, 1995); Kathryn Kish Sklar, "Hull House in the 1890s: A Community of Women Reformers," *SIGNS* 10 (1985): 658-77.
- * 31 Bacon, *Interior*, xii.
- * 32 *Ibid.*, 99.
- * 33 *Ibid.*, 7-8, 93, 99, 111-113.
- * 34 *Ibid.*, 99. 下線強調は筆者による。
- * 35 *Ibid.*, 111-112.

- * 36 Ibid., 111.
- * 37 Ibid., 110-115.
- * 38 Ibid., 17.
- * 39 Ibid., 100.
- * 40 Ibid., 123.
- * 41 Ibid., 101-102.
- * 42 Ibid., 101.
- * 43 Matthews, 35.
- * 44 Ibid., 93.
- * 45 Edward Bellamy, *Looking Backward 2000-1887*, Alex MacDonald, ed., (Ontario: Broadview Literary Series, 2003)を参照した。Houghton Mifflin から1889年に出版された版を基にしている。この本は1888年の発表当初、翌年までに16万部以上売れたという。エドワード・ペラミー著 中里明彦訳 本間長世解説『かえりみれば—2000年より1887年』アメリカ古典文庫7 (研究社、1975年)、3。
- * 46 Dolores Hayden, *The Grand Domestic Revolution* (Cambridge: The MIT Press, 1985), 136.
- * 47 Bacon, *Interior*, 42.
- * 48 Ibid., v.
- * 49 Ibid., 122-123.
- * 50 Ibid., 31.
- * 51 Ibid., 96.
- * 52 Ibid., 225.
- * 53 Ibid., 230.
- * 54 Matthews, 93.
- * 55 アメリカのジャポニズムを網羅的に紹介した羽田美也子『ジャポニズム小説の世界』(彩流社、2005年)によると、19世紀当時舞台上で演じられた日本人の類型として、「貞操なる武家の女性」「無鉄砲なサムライ」、曖昧な笑いを浮かべ、お辞儀を繰り返す「ジョリー・ジャップ」があった。36。
- * 56 Kirk Jeffery, "The Family as Utopian Retreat from the City: Nineteenth-Century Contribution," in Sallie Teselle, ed., *The Family, Communes and Utopian Societies* (New York: Harper Torchbooks, 1971): 21-41.
- * 57 Ibid., 22.

*58 Megan Thorn, *Roots and Recollections: A Century of Rockywold-Deephaven Camps* (Holderness, NH: Rockywold-Deephaven Camps, Inc., 1997), 23.

*59 Ibid., 29.